



JAPAN LIVE YELL project



IN ふくしま

福島県文化芸術連携事業

2023 事業報告書



ご挨拶

JLYp ふくしまの終了にあたって

私たちは今年度、福島県文化芸術連携事業「JAPAN LIVE YELL project in ふくしま」
として、県内各地で 22 企画の連携事業を展開しました。

福島県文化センターの大ホールが地震による被害で使用できない中でも、県内の文化
芸術活動の進展を図るために、中間支援団体として何かできることはないかと考えた
ところです。

一つには、文化芸術活動が、社会的な課題の解決の一助となれないかということです。
そこで、東日本大震災の伝承活動を織り込んだ、語り部と被災地出身の音楽家による
朗読劇や、共生社会に向けて、障がいのある方も一緒に楽しめるバリアフリー演劇の
上演、地域の振興につなげようと、奥会津での若手アーティスト応援コンサートの開催と
観光プロモーションビデオの製作などにチャレンジしました。

二つめには、そのように文化の力で人々の心や社会を動かしていくためには、連携の
仕組みづくりと人材の育成が急がれるということです。

そこで、「文化による地域創生」のシンポジウムを開催するとともに、文化団体等と連携
して、ホール職員とアーティストが共に学び合うマネジメント研修会も実施しました。

取組は始まったばかりですが、文化による地域創生の光が見える経験をさせていた
だけましたことに、文化庁をはじめ連携団体の皆様、御協力、御後援いただきました
皆様に心から感謝申し上げます。

このプロジェクトを契機に、福島県における文化芸術活動が着実に進展し、ふくしまの
復興創生にも寄与することが出来ますよう取り組んでまいります。

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 鈴木 淳一

バリアフリー演劇公演

Touch

オーファンズ

～孤独から愛へ～ORPHANS

字幕や音声ガイド、手話通訳・ステージツアーなどをおこない、障がいの有無にかかわらず五感で舞台芸術を楽しむことを目指した「バリアフリー演劇」



開催日時 10月3日(火) 10時00分～12時15分 福島市飯坂温泉観光会館 パルセいいざか

↓ “みんな”でつくる「バリアフリー演劇」

本公演では、出演の「東京演劇集団風」による、さまざまな情報保障がおこなわれました。開演前には、「舞台説明」として役者がバリアフリー演劇のサポート内容を紹介しました。聴覚障がいのある方に向けては、物語の進行に合わせて、手話通訳者が役者の隣に立ち手話でストーリーを表現しました。舞台後方にはセリフなどの字幕を表示しました。視覚障がいのある方には、役者の動き・表情などを説明する音声ガイドを客席に流しました。また、開演前には、より作品の世界を理解するため、ステージ上にあがっていただき、大道具の位置などを確認する機会をもうけました。

あわせて、会場案内のための手話通訳士を手配し作品のあらすじや出演者などを点字で紹介した資料も

作成しました。

当日は、子どもから大人まで、多くの方にご来場いただきました。公演の進行にあたっては、タイムテーブルの調整や、席の移動などを柔軟におこないました。入場に時間を要し、開演時刻を繰り下げた際も、会場全体があたたかい雰囲気で見守っていました。“みんな”でひとつの“劇場空間”をつくりあげられたことが印象的でした。

支援学校の生徒からは「初めてげきをみました」「さまざまな障害をもっている人たちでも、話の内容などを分かりやすく、楽しむための工夫がたくさんありすこいとおもいました」などの意見をいただきました。

↓ 単なる観劇だけではない、 非日常の体験も

より作品を理解し楽しんでいただくため、開演前と終演後に、舞台にあがるバックステージツアーをおこないました。舞台上では、役者と手話などでコミュニケーションをとりながら、大道具・小道具・衣装などに触れ、作品の世界観を具体的にイメージしてもらいました。また、役者との記念撮影も大人気で、子どもから大人まで、大勢の方に参加していただきました。

バックステージツアーの実施にあたっては、劇団員や当財団職員、手話通訳士を客席や舞台上に配置し、参加者の安全確保につとめました。



↓ アメリカ発の 心温まるストーリー

上演作品の『Touch～孤独から愛へ～』(原題『ORPHANS(オーファンズ)』)は、1985年にシカゴで初演後、ニューヨークのオフ・ブロードウェイで絶賛を浴び、1987年には映画化もされました。

舞台は北フィラデルフィアのアパートの一室。アレルギーの発作でほとんど外に出られない弟フィリップと不良の兄トリートの、2人の孤児の兄弟が暮らしています。2人の前に謎の紳士ハロルドが現れたことで、「孤児」である3人が孤独を抱えながらも、真剣に相手と向き合うことで新たな一歩を発見していくストーリーです。

○ 東京演劇集団風

<今、なぜ演劇なのか>、この時代、この社会において演劇の為すべきことは何であるかという問いで、1987年、東京演劇集団風は設立された。

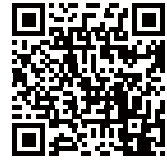
以後、ロシアの作家アントン・チェーホフや20世紀を代表するドイツの亡命作家ベルトルト・ブレヒトの作品を柱に東京での上演活動を展開すると同時に、青少年を対象とした全国ツアーも意欲的に行っている。

1999年、東京・東中野に専属の拠点劇場<レパートリーシアター KAZE>を建設、年間6～8本のレパートリー作品と新作の上演を行う。

2019年、「バリアフリー演劇」を開始。これまでの舞台を、目の不自由な方や耳の不自由な方とも一緒に共有できるよう、「バリアフリー」の舞台づくりに挑戦している。

「ふくしま若手アーティスト×奥会津」応援ビデオ

「ぼくらのうた」



YouTube

奥会津地域の振興を目的として、福島にゆかりのある若手アーティスト3人が登場するプロモーションビデオを制作しました。木造校舎が印象的な「旧喰丸小学校」、おだやかな水面をたたえる「霧幻峡の渡し」など、奥会津の各所で撮影をおこないました。



▶ 異分野コラボレーションが生み出す音色

撮影に参加したアーティストは、福島県郡山市在住のヒューマンビートボックス・TATSUYA、いわき市出身のフラメンコギタリスト・凜 -Rin-、地元只見町出身のシンガーソングライター・大竹涼華の3人。

多彩で豊かなビートボックスにあわせて、エッジのきいたフラメンコギターと、やさしく包み込むような歌声が重なりあう、新たなコラボレーションとなりました。

プロモーションビデオ制作にあわせて書き下ろされた新曲『ぼくらのうた』は、旧喰丸小学校の校庭にたたずむイチョウの木や校舎に差し込む光など、奥会津をイメージしてつくられました。

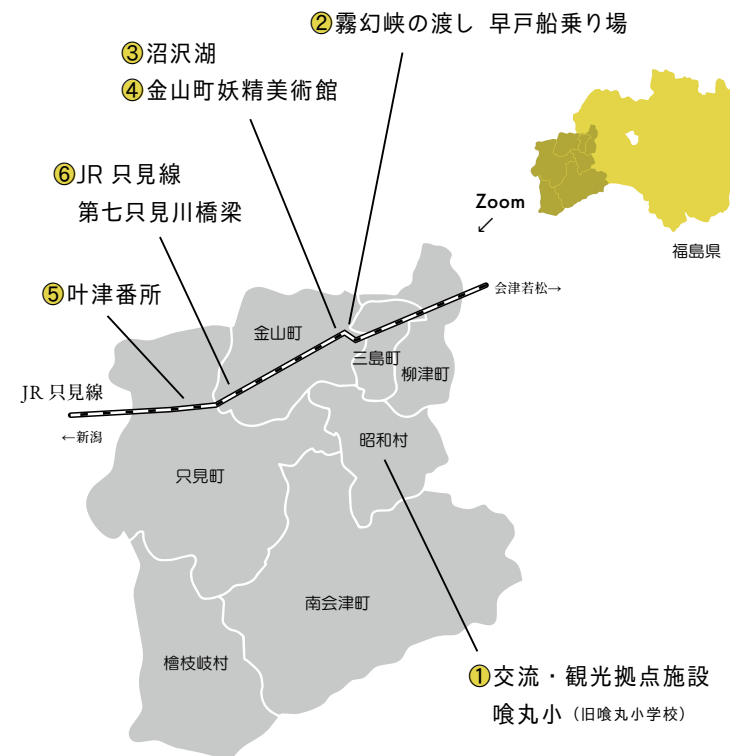
▶ 奥会津の魅力をもつけて

2011年7月に発生した新潟・福島豪雨災害は、福島県会津地方を中心に甚大な被害をもたらしました。なかでもJR只見線は、第七只見川橋梁の流出などによって長期間の運休を余儀なくされました。

わたしたちは、2022年に全線運転再開を果たした只見線と沿線エリアを応援したいという考えのもと、プロモーションビデオの撮影をおこないました。ロケ地選定にあたっては、只見川電源流域振興協議会および映像ディレクター・半野洋光氏の協力を得て、奥会津の自然が織りなす魅力が最大限に伝わる場所を探しました。



▶ 奥会津ロケ地マップ



○ TATSUYA (ヒューマンビートボックス)

ロンドン、ドイツ、ニューヨークのApollo Theaterに出演するなど世界的に活動。2016年にシンガポールで開催された大会で日本人として初の優勝、国際チャンピオンとなる。現在は福島県郡山市にてアーティスト活動以外にも、学校講演やイベント開催など福島県を中心に様々な活動を行っている。

○ 凜 -Rin- (フラメンコギタリスト)

高校在学時にフラメンコに出会ったことをきっかけに本場スペインへの留学を決意、スペインでは名だたるギタリストに師事する。現在は、ギタリストとしての活動だけに留まらず、プロデューサー、ディレクター、作詞家、作曲家、編曲家、ベーシストとしての顔も併せ持つ。

○ 大竹涼華 (シンガーソングライター)

福島出身の片平里葉に影響を受け、ギターを手に作詞作曲を始める。2016年、「風とロック ACO ONE GRAND-PRIX」に最年少出場。当時唯一だったオリジナル曲を引っさげ、見事優勝。風とロック芋煮会のステージに立った。東京を拠点に各地イベントや風とロック CARAVAN 福島で活動中。



音楽と語りによる フクシマの伝承と未来



「請戸小学校物語」



→ ふるさとを失わないために

福島県浪江町の請戸地区は、東日本大震災によって壊滅的な被害を受けました。海沿いに位置する請戸小学校も、2階の床の上まで津波が押し寄せました。絵本『請戸小学校物語』は、迫りくる津波から高台へ避難し、命を守った子どもたちの体験を描く物語です。

朗読を担当した横山和佳奈は、震災当時、請戸小学校の6年生でした。「自らの被災体験を伝えないと、請戸という場所がなくなってしまう」と、語り部になることを決意。東日本大震災・原子力災害伝承館の職員として働きながら、「震災語り部講話」をおこなっています。

→ 震災を若い世代へ語り継ぎたい

福島県内には、東日本大震災で起きた被害を、みたことがない子どもたちがいます。

構成劇では、福島東稜高校演劇部の1年生が小学校の先生や児童の役を担いました。彼らは、津波を体験したことがありません。どうすれば、役を演じることができるだろうか。実際に津波で失われたまちの写真を見ながら、練習を繰り返しました。

公演当日は、200名を超える来場者に対し、精一杯の

語り部と和楽器で「命の大切さ」を伝え、震災を知らない子どもたちへ紡ぐ企画として実施しました。東日本大震災・原子力災害伝承館との共催で、被災地出身の若手アーティストである、箏・尺八・和太鼓の3人の奏者とともに、新たな表現に挑みました。

気持ちを込めて熱演。高校生は、「次は自分たちが震災について伝えていけるようになりたい」と語りました。

→ あたらしい表現によって 伝えられたこと

本公演は、朗読と3人の和楽器奏者による音楽にあわせて上演しました。地震の音、まちが失われたときの“こころ”の音。それぞれが言葉の持つ力を引き出す音楽となり、わたしたちの「命を守ること」の大切さを伝えることができました。

○ 出演

横山和佳奈（東日本大震災・原子力災害伝承館職員）浪江町出身
遠藤元気（和太鼓奏者 / 山木屋太鼓会長 G-project 所属）川俣町出身
箏男 kotomen 大川義秋（from 桜 men）（箏奏者）双葉町出身
中島 麗（尺八奏者）相馬市出身

○ 演出

青木淑子（NPO法人 富岡町3・11を語る会 代表）

○ 原作

請戸小学校物語制作委員会（NPO法人 団塊のノープレス・オブリージュ）

開催日時

8月12日（土）14時00分～15時50分

とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）小ホール





シンポジウム

文化による 地域創生に 求められる “人材”と“しくみ”

文化による地域創生のため、
「コーディネーター」や「ワークショップ」を
うまく機能させるためには何が必要か？を考えるシンポジウム



本 シンポジウムは、「文化による地域創生」について、従来からの思考の転換や新たな人材確保という視点で取り組んだ事例をとおして課題解決のための手法を学び、今後の展望を明らかにする目的で開催されました。

はじめに、中川幾郎氏（帝塚山大学名誉教授／日本文化政策学会顧問）によって、「自治体文化政策」における課題を提起したうえで、図書館や公民館、劇場・音楽堂といった公立文化施設に関わる人々のあり方を学ぶという、本シンポジウムの目標が示されました。

↓
文化による地域創生は可能か？

神代浩氏（元文部科学省社会教育課長／図書館海援隊隊長）による基調講演では、「本がタダで借りられるところ」という公共図書館のステレオタイプを崩し、課題解決支援型サービスを積極的に導入することで地域創生に欠かせない公共機関という位置付けを得た事例が紹介されました。そして近年では文化施設を中心とした地域活性化がうまく行われていない現実に触れ、地域創生の担い手として文化に何が必要か問いかけました。

↓
コーディネーターの可能性と必要な環境とは

森本真也子氏（NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会理事）は、文化事業をとおして人と人の出会いや共感を生み出し、互いを尊重しながら生き合う地域づくりを目指す「コーディネーター」について、その実現に必要な考え方や課題について報告しました。

↓
えずこホールの取組を支える工夫とは

玉淵博之氏（えずこホール仙南芸術文化センター館長）は、「60歳からの楽しいクラブ活動」（2014年～）や「えずこサンタプロジェクト」（2016年～）といった、えずこホールで実践した地域課題に応じた文化事業のあり方や思考について触れ、組織体制や事業を支える仕組みなどを解説しました。

↓
文化がいのちを守る～無縁社会の時代と大震災を契機とした文化的挑戦～

天野和彦氏（福島大学特任教授／（一社）ふくしま連携復興センター代表）と神代氏による対談では、東日本大震災後に行われた「歌声喫茶」や「こども映画学校」の取組みから、繋がりを失った人々に必要なものは何か、次世代を担う子どもたちに向けたメッセージとは何かについて語り合いました。

シンポジウムの締めくくりとして、中川氏をモデレーターに、登壇者がこれまでの講演を振り返りつつ、文化活動のコーディネーターに必要な環境、仕組み、業務のあり方などを議論しました。また、参加者がスマートフォンから投稿した質問をリアルタイムで投影し、壇上とフロア双方による意見交換が行われました。

開催日時 10月27日（金）13時30分～17時30分 とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）



アートマネジメント／ワークショップ研修会

劇場・音楽堂の職員とアーティストたちが合同でコーディネート論やワークショップ論などを学び、企画制作を実践した集中講座

地域の文化コーディネーターや学校などで活躍するワークショップ人材の育成を目指し、県内各地の劇場・音楽堂の職員やアーティストたちが4日間にわたって必要な理論を学びました。講義形式のものから全身を動かしながら行うものまで、バラエティに富んだ講座が展開されました。また、より実践的な講座として「対話型鑑賞公演」（今回はワークショップ形式の演劇公演となりました）を開催するためのグ

ループワークを受講生が一丸と行って行いました。

研修会は、受講生が互いに打ち解けることも兼ね、ダンスによる身体表現を用いたアイス・ブレイクの実践講座から始まりました。その後座学による講義を交えつつ、リトミック（リズム教育）について学び、様々なワークショップの手法を知ることができました。他方、コーディネーターとして劇場・音楽堂の職員とアーティストの双

方に必要な知識として、学校でワークショップを行う際の指導案作成や権利・契約に関する法律について学びました。

また、一連の研修の集大成として「対話型鑑賞公演」を開催することを目指し、グループ分けから企画制作まで講師陣による指導を受けながら実践しました。研修会では2つのグループがそれぞれ異なる演目を創案し、実際に福島市（公開リハーサル）、伊達市、三春町で公演を行いました。

タイムテーブル

- 10月28日（土）
 - ワークショップⅠ
イントロダクション
地域における文化の必要性
楠原竜也 玉川大学芸術学部准教授
中川幾郎 帝塚山大学名誉教授/日本文化政策学会顧問
森本真也子 NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会理事
 - ワークショップⅡ
リトミック1
文化政策入門Ⅰ
ワークショップⅢ
リトミック2
杉山智恵子 東京藝術大学音楽学部非常勤講師
中川幾郎
杉山智恵子
- 10月29日（日）
 - 指導案Ⅰ
コーディネーターの役割と必要性Ⅰ
コーディネーターの役割と必要性Ⅱ
コーディネーター論Ⅰ
ワークショップⅣ
リトミック3
戸倉深希子 福島県教育委員会主任社会教育主事
森本真也子
中川幾郎
森本真也子
杉山智恵子
 - 11月25日（土）
 - 指導案Ⅱ
コーディネーター論Ⅱ
文化政策入門Ⅱ
公立文化施設の役割Ⅰ
公立文化施設の役割Ⅱ
グループワークⅠ
戸倉深希子
森本真也子
中川幾郎
松井憲太郎 富士見市民文化会館きらり☆ふじみ前館長
松井憲太郎、中川幾郎
中川幾郎、森本真也子、松井憲太郎
 - 11月26日（日）
 - 権利と契約 田島佑規 骨董通り法律事務所弁護士
 - ワークショップⅤ 楠原竜也
 - グループワークⅡ 中川幾郎、森本真也子、松井憲太郎、楠原竜也
 - グループワークⅢ 中川幾郎、森本真也子、松井憲太郎、楠原竜也
 - 12月5日（火）、6日（水）、7日（木）
 - 成果発表公演 公開リハーサル とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）
伊達公演 ファミリーパークだて
三春公演 三春交流館「まほら」



参加者の声

アーティストとして参加 篠木 美津枝さん
初対面の方々と、数回の対面のみで企画を組み立てて、公演作品を創造していく工程は正直大変なプログラムでした。しかし、参加者全員が持てる能力を全力で出し合って、僅かな時間の中で創作し発表できたのは奇跡的とも思われます。皆さんの能力と「文化のチカラ」に感服です。



三春交流館「まほら」職員 横田 涼さん
普段は既成の作品をアーティストに提供してもらう立場なので、今回マネジメント側とアーティスト側の両方でひとつの作品を作り上げることは、とても新鮮であり、かつ難しい取り組みでした。お互いの考え方の違いを理解するととても貴重な経験となりました。



福島県の文化振興政策に期待すること

日本文化政策学会顧問 中川幾郎



図書館は、たんなる無料貸本屋ではなく、博物館は、たんなる見せ物小屋兼物置ではない。公民館は、安上がりのカルチャーセンターではなく、公立文化ホールも、たんなる公設演芸場ではない。それらは、れっきとした社会教育施設である。特に、公立文化ホール（劇場・音楽堂）は、「劇場・音楽堂活性化法」において教育機関との連携が求められているだけではなく、福祉機関・医療機関・地域社会との連携も大臣告示（基本方針）で要請されている。

わたしは、今日的な公立劇場・音楽堂のあり方を考える上で、

- A 貸し会場主体の公立文化ホール
- B 自主事業と銘打って（パッケージ型の買い取り興業であれ）事業提供をする枠を持つ公立文化ホール
- C 保育所・幼稚園・認定子ども園、小中学校、社会福祉施設などとの連携を保ち、インリーチ、アウトリーチによる事業供給機能を果たす公立文化ホール
- D 低所得者、失業者、時間的困窮者、病気を有している人、社会的に孤立している人、家族環境に恵まれない人、などを対象とした社会福祉的文化事業を供給する公立文化ホールとを分類している。

住民の税金を投入して運営される公的施設・機関である限り、めざすべきは、C型、D型の機能を備えることだろう。福島県内の自治体文化ホールが、この方向に向けて前進していくことを期待したい。だが、図書館、公民館、博物館、劇場・音楽堂をつかさどる自治体行政が「法定外自治事務」であり、各自治体の自主性・主体性に委ねられていることが、かえってその妨げになっている。つまり、義務ではないとらえるための「緩み」が存在し、軽く扱いがちなのである。

この障壁を克服するために、県・市町村の自主立法（自治体条例）による法治主義秩序に位置づける「文化基本条例」の制定と、計画行政秩序に位置づける「文化行政基本計画」の策定が必要となる。さらに、この条例の趣旨が活かされているか、基本計画がキチンと実現されているか、また、主要事業が追求している政策効果が実現されているか、などを審議する「自治体文化審議会」が必要となるのである。

今回のシンポジウムは、本来の社会教育の意義を問い直し、ユネスコの「生涯学習」が求めている主題との深いつながりに関しても、科学的に認識し直す貴重な機会となった。人びとの芸術や文化に関わる権利は、まさに基本的人権そのものなのであり、各種社会教育施設はその権利を保障する最先端の施設・組織である。福島県庁及び県内の市町村自治体におかれても、この基本的認識を明確にして、これからの自治体文化政策に取り組んでいかれることを切に願う。

シンポジウムに参加して

元文部科学省社会教育課長／図書館海援隊隊長 神代浩



最初に裏話を一つ記録として残しておきたい。文化をテーマにした講演会やシンポジウムは毎年各地で行われているが、その殆どは言葉のやり取りのみである。せいぜい映像を少し流す程度。そのマンネリのどこかに風穴を開けたかった。幸い旧知の天野和彦さんと一緒にできると聞いたので、彼に「いつものように」ギターを弾いてもらって、会場の参加者と一緒に歌う場を設けたいと考えた。人間社会における文化の重要性を理解してもらうためには、言葉だけでなく、少しでも生のパフォーマンスを取り入れることで会場の空気を変える必要があったからである。

本番直前の私の無茶ぶりに真摯に対応していただいた福島県文化振興財団のみなさまとギターをお貸し下さった伊達市ふるさと会館のみなさまに、まずは感謝申し上げたい。

言葉を聞いて頭で理解し、一緒に歌いながら心と身体で感じる。このようなシンポジウムを開催できたことには大きな意義がある。なぜなら、文化施設や文化団体・実演家がこれまで実施してきたが、これまで以上に取組みねばならないことが明らかになったからである。

文化施設で日々催される様々な文化イベント。文化団体や実演家が実施する様々な文化活動。私たちはこのようなイベントや活動に参加することで、心を揺さぶられ、身体に変化が起きる。ときには思いがけず頭を働かせることもある。そのような経験を経て、明日からも生きていく活力を得る。

文化施設と文化団体・実演家は、そのような経験をより多くの人々に、より頻繁に起こせるように、それぞれの役割を果たさねばならない。そんなごく当たり前のことを今回のシンポジウムは再確認する場となった。

なぜ再確認する必要があるのか？それは、その当たり前のことをしようとするのを妨げるものがあるからだ。大きな天災、疫病、戦争、そして文化への無理解。これらにどう立ち向かうか？ときに闘い、ときに付き合い、ときにかわしながら、いかに当たり前のことを続けていくか？そのためのヒントを、今回のシンポジウムの登壇者たちは、理論と実践の両面から十二分に提供して下さった。

あとは参加者のみなさまが、自分たちの役割を果たすとともに、今回参加できなかった文化関係者に本シンポジウムで起こったことを伝え、行動の輪を広げていくことが肝要である。

その際一つ留意すべきことは、多くの文化関係者が陥っている一つの思い込みを排除することである。それは「文化はなくても人間は生きていける」との考え方である。今回のシンポジウムに参加された方々であれば「文化がないと人間は生きていけない」ことを十分理解したはずである。まずはその信念を文化関係者の間で共有し、次に文化に無理解な人々に対して伝え続け、彼らの考えを変える努力を重ねることが求められる。

今回のシンポジウムをきっかけに、そんな動きが福島から全国へ広がっていくことを期待している。

実施企画一覧図

福島市

とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）

- 8月12日(土) 音楽と語りによるフクシマの伝承と未来～請戸小学校物語～
- 9月22日(金) ふくしま出身の若手アーティスト発掘・応援コンサート 福島公演
- 10月7日(土) 舞台芸術活動による「福島」の伝承 朗読と音楽による構成劇
「生きている 生きてゆく ～ビッグパレットふくしま避難所記より～」
- 10月27日(金) シンポジウム
文化による地域創生に求められる“人材”と“しくみ”
- 10月28日(土)・29日(日)／11月25日(土)・26日(日)
アートマネジメント/ワークショップ研修会
- 12月5日(火) 対話型鑑賞公演 公開リハーサル
- 1月6日(土)・7日(日)／13日(土)・14日(日)
舞台技術ワークショップ

パルセいいざか

- 10月3日(火) バリアフリー演劇公演 Touch ～孤独から愛へ～ ORPHANS

喜多市

喜多方プラザ文化センターほか

- 8月4日(金)～7日(月) 喜多方発21世紀シアター

伊達市

伊達市ふるさと会館（MDD ホール）

- 8月19日(土) MDD 爆笑寄席
- 9月23日(土・祝)・24日(日)
MDD Special LIVE
- 11月8日(水) 近藤房之介 with 満鉄&金ボタン
- 11月24日(金) 三四朗 / Mimimika
- 12月17日(日) MDD Jazz History Concert

ファミリーパークだて

- 12月6日(水) 対話型鑑賞公演 伊達公演

南相馬市

南相馬市民文化会館ゆめはっと

- 11月3日(金・祝) 米寿記念演奏会
館野泉ピアノ・リサイタル

昭和村

交流・観光拠点施設「喰丸小」

- 10月15日(日)
ふくしま出身の若手アーティスト
発掘・応援コンサート 奥会津公演

三春町

三春交流館「まほら」

- 9月30日(土)・10月1日(日)
トルヴェール・クワルテットコンサート サクソフォン四重奏
- 12月7日(木) 対話型鑑賞公演 三春公演

郡山市

けんしん郡山文化センター（郡山市民文化センター）

- 12月3日(日) 郡山交響楽団 第5回公演
オーケストラストーリーズ「100万回生きたねこ」
- 1月13日(土) 郡山交響楽団 第6回公演
ニューイヤーガラコンサート「福がいっぱいコンサート」

白河市

白河文化交流館コミネス

- 白河まちなか音楽3Days 2023
- 10月7日(土) LEO 箏リサイタル
- 8日(日) N 響メンバーによる弦楽三重奏
- 9日(月・祝) マチネの終わりに～本と音楽の素敵な出逢い～

企画①

喜多方発21世紀シアター



芝居・音楽・人形劇・大道芸

プロのパフォーマンスを、地域の子どもたちへ

喜多方プラザをはじめ喜多市街地の酒蔵や店舗、地域公民館など 12か所にて、プロの舞台芸術創造団体 50 団体が 53 作品、55 公演を実施。子どもから大人まで 250 名を超える運営ボランティアの協力もあり、3,000 名を超える方に来場いただきました。プロのパフォーマーが身近にいない「地方の子ども達」へ、本当の芸術文化に積極的に触れさせてあげたい。そんな思いがつながり、地域とともに作り上げるイベントとなりました。



日時 8月4日(金)～7日(月) 10:00-20:00

場所 喜多方プラザ文化センターほか 12 会場

出演 東京演劇アンサンブル、
ザ・ニュースペーパーほか 50 団体

※会場・催しによって時間は異なる

DATA

延べ参加者数：大人（18歳以上）	2,252名	子ども（18歳未満）	949名
延べ出演者数：プロ			143名
延べ出演団体数：プロ（オープニング公演、ゲリラ公演2公演を含む）			52団体
延べスタッフ数：舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ			358名
清掃・警備スタッフ			8名
合計（うちボランティア 254名）			366名
延べ外注先数：			67事業者
連携団体数：			40団体





記憶をつなぐ若者が、
福島を伝承し未来に伝える

被災地出身の若手アーティストと、自らの被災体験を伝える語り部がコラボした新作構成劇。双葉町出身の箏奏者・大川義秋が作曲した『麗輪』などを、やさしい音色で演奏しました。構成劇では、震災当時請戸小学校6年生で、現在語り部として活動する横山和佳奈と、震災の記憶がほとんどない福島東稜高校演劇部1年生が共演し、津波から必死に逃れる様子を熱演。観客からは「被災地出身の若者が頑張っている姿に勇気もらった」「国内外に発信してほしい内容だ」との声をいただきました。

日時 8月12日(土) 14:00-15:50
場所 とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)小ホール
出演 横山和佳奈(東日本大震災・原子力災害伝承館職員) 浪江町出身
遠藤元気(和太鼓奏者) 川俣町出身
箏男 kotomen 大川義秋(from 桜 men)(箏奏者) 双葉町出身
中島 麗(尺八奏者) 相馬市出身

DATA

参加者数:	230名
出演者:	プロ 3名
	アマチュア大人(18歳以上) 1名
	アマチュア子ども(18歳未満) 6名
	合計 10名
出演団体数:	プロ 1団体
スタッフ数:	舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 33名
	清掃・警備スタッフ 4名
	合計(うちボランティア13名) 37名
外注先数:	10事業者
連携団体数:	合計 34団体



芸術で笑えるって素敵なこと!!
質の高い芸能の舞台を実施

古典落語の演者として知られる三遊亭遊雀、“なぞかけ”の名手ねづっち、ひとりミュージカル・パントマイムの王子菜摘子を迎え、本格的な日本の芸能を開催。三遊亭遊雀による落語は、古典落語の中に日常生活で起きた小ネタを組み込み、観客を笑いに包み込みました。ねづっちの漫談では、夫婦間の日常ネタなど、身近な話題の“なぞかけ”を多く披露し観客を魅了。王子菜摘子のひとりミュージカルでは、観客から得たお題で即興の歌詞・音楽を創り出すなど、会場を大きく沸かしました。

日時 8月19日(土) 15:00-16:50
場所 伊達市ふるさと会館 MDD ホール
出演 三遊亭 遊雀(落語家)、ねづっち(漫談家)、
王子 菜摘子(ミュージカル俳優)

DATA

参加者数:	78名
出演者:	プロ 3名
スタッフ数:	舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 9名
	合計(うちボランティア5名) 9名
外注先数:	4事業者
連携団体数:	32団体



福島発！
異分野音楽コラボレーション

郡山市在住の TATSUYA、いわき市出身の凜 -Rin-、只見町出身の大竹涼華によるコラボレーションライブ。ヒューマンビートボックス、フラメンコギター、シンガーソングライターと、異なる分野で活躍する3人が集結。このコンサートのために作詞・作曲された楽曲『Tri-Angle』を初披露しました。参加者がビートボックスの技術について質問する場面もみられ、終始和やかな雰囲気でした。アンケートからも「多様なジャンルが聞けて楽しかった」「若い人の力を感じた、応援したい」などの声をいただきました。



日時 9月22日(金) 19:00-20:30
 場所 とうほう・みんなの文化センター
 (福島県文化センター) 小ホール
 出演 TATSUYA (ヒューマンビートボックス)
 凜 -Rin- (フラメンコギタリスト)
 大竹涼華 (シンガーソングライター)

DATA

参加者数：	76名
一般	73名
大学生以下	3名
出演者：プロ	3名
スタッフ数：	
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	21名
清掃・警備スタッフ	4名
合計(うちボランティア3名)	25名
外注先数：	13事業者
連携団体数：	38団体



MDD
Special LIVE

福島県内で活躍する
バンドメンバーが集結し
エキサイティングなLIVEを開催

伊達市ふるさと会館が開館した1992年から継続される、公共ホール主催のロックコンサートとして全国的に珍しい企画事業。開館31年目を迎えた今回は、1日目は主にハードロックバンド、2日目はポップス系バンドを迎え、県内外で活動する合計18バンドが出演しました。また、ゲストとして伊達・福島地区出身のロックミュージシャン KOORI Guitar と BOØWY Tribute Band を招き、2日間にわたる特別なライブとなりました。

日時 9月23日(土・祝)、24日(日) 11:00-17:20
 場所 伊達市ふるさと会館 MDD ホール
 出演 BOØWY Tribute Band、
 KOORI Guitar (桑折ギター) ほか



DATA

延べ参加者数：	533名
大人	467名
子ども(小学生以下)	66名
出演者：プロ	21名
アマチュア大人(18歳以上)	80名
アマチュア子ども(18歳未満)	1名
合計	102名
出演団体数：	プロ2団体 アマチュア16団体
スタッフ数：舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	31名
	(うちボランティア17名)
外注先数：	15事業者
連携団体数：	32団体





企画 ⑥

熟成したホールで織りなされたサクソフォンコンサート

三春交流館「まほら」開館 20 周年を記念した、サクソフォン四重奏によるコンサート。公演前日の 9 月 30 日は、トルヴェール・クワルテットによるワークショップが開催され、地元の田村高校と三春中学校の吹奏楽部員が参加。プロの奏者による演奏指導がありました。公演当日はワークショップに参加した 2 校の生徒と、トルヴェール・クワルテットがプレコンサートを開催し、観客を盛り上げました。その後、本公演ではピアノの小柳美奈子も加わり、プログラムに富んだコンサートとなりました。



日時 10月1日(日) 13:15 ~ 16:00

※9月30日(土)には地元中高生を対象としたワークショップを開催

場所 三春交流館「まほら」(まほらホール)

出演 Trouvère Quartet (トルヴェール・クワルテット)
小柳美奈子(ピアノ)

DATA

参加者数： 304名
一般 281名
高校生以下 23名

出演者：

プロ 5名
アマチュア大人(18歳以上) 1名
アマチュア子ども(18歳未満) 25名
合計 31名

出演団体数：プロ1団体 アマチュア2団体

スタッフ数：

舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 29名
清掃・警備スタッフ 6名
合計(うちボランティア15名) 35名

外注先数： 7事業者

連携団体数： 36団体



企画 ⑦

バリアフリー演劇公演

「Touch ~ 孤独から愛へ ~ ^{オーファンズ} ORPHANS」

すべての人たちが
自由に芸術を体感する
「新しい演劇鑑賞のかたち」

視覚・聴覚の障がいの有無にかかわらず、だれもが楽しめるよう工夫されたバリアフリー演劇公演。手話通訳のほか、字幕や音声ガイドを取り入れました。開演前には、見えない・見えづらい方などを対象としたバックステージツアーを開催。事前に舞台の大きさや小道具の位置を知ることにより物語に入り込みやすくなるよう工夫しました。

公演にあたっては、福島県内各地の特別支援学校、(公社)福島県視覚障がい者福祉協会、(一社)福島県聴覚障害者協会にご協力をいただきました。また(社福)福島県共同募金会より、児童・生徒の移動にかかる費用を一部補助していただきました。

日時 10月3日(火) 10:00 ~ 12:15

場所 福島市飯坂温泉観光会館 パルセいざか

出演 東京演劇集団 風

DATA

参加者数： 378名

出演者：プロ 5名

出演団体数：プロ 1団体

スタッフ数：

舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 20名

(うちボランティア4名)

外注先数： 4事業者

連携団体数： 38団体



トルヴェール・クワルテット
サクソフォン四重奏

原子力災害による避難者から受け止める「生きていること」「生きてゆくこと」

原子力災害によって避難を余儀なくされた人々のつづやきを、朗読と音楽による構成劇にして上演。富岡町民と川内村民の避難所となった「ビッグパレットふくしま」。激変した日常の暮らしの中で、人が人に話す言葉を、富岡町民などの有志で結成した劇団が演じました。「朗読劇を初めて見ましたが、とても新鮮でした。」「福島県民全員で考える時期。今日の観劇を第一歩にしたい。」との声もありました。東日本大震災の避難所の中で生まれた様々な言葉を、朗読劇のかたちで初めて中通りで上演できたことの意義は、風化防止という視点での発信という意味でも非常に大きいと感じます。



日時 10月7日(土) 14:00～15:00
 場所 とうほう・みんなの文化センター
 (福島県文化センター) 小ホール
 出演 あおぎよしこ (脚本・演出・出演)
 富岡町民劇団ホーム (出演)
 伊藤優大 (演奏)
 和合亮一・天野和彦 (特別出演)

DATA 参加者数: 144名
 出演者: 13名
 出演団体数: プロ 1団体
 スタッフ数:
 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 6名
 外注先数: 4団体
 連携団体数: 32事業者

「生きている 生きてゆく」ビッグパレットふくしま避難所記より
 舞台芸術活動による「福島」の伝承 朗読と音楽による構成劇

白河まちなか音楽3Days 2023
 LEO 箏リサイタル

日本の伝統楽器
 箏×若きスター邦楽奏者が
 白河に初登場!

伝統的な邦楽作品から坂本龍一、ピアソラ、あるいはチック・コリアといった幅広いジャンルの作品を演奏。響きわたる音色からは、情緒・色彩の世界が感じられ、来場者の心が満たされる公演となりました。箏とピアノのコラボレーションでは「新体験の音楽に感動した」「技法が間近でみられてすごかった」など満足度の高さが感じられる声を多くいただきました。

日時 10月7日(土) 15:00～17:00
 場所 白河文化交流館コミネス (小ホール)
 出演 LEO(箏)
 ロー・磨秀 (ピアノ)

DATA 参加者数: 144名
 出演者: プロ 2名
 出演団体数: プロ 1団体
 スタッフ数:
 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 11名
 清掃・警備スタッフ数 4名
 合計 (うちボランティア3名) 15名
 外注先数: 4事業者
 連携団体数: 36団体





日時 10月8日(日) 15:00~16:30
場所 白河文化交流館コミネス(大ホール)
出演 大宮臨太郎(ヴァイオリン)
坂口弦太郎(ヴィオラ)
山内俊輔(チェロ)

参加者数:	225名
出演者:プロ	3名
出演団体数:プロ	1団体
スタッフ数:	
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	11名
清掃・警備スタッフ	4名
合計(うちボランティア5名)	15名
外注先数:	2事業者
連携団体数:	36団体



N響トップ奏者たちがクラシック音楽の名曲を披露

日本最高峰のオーケストラ「NHK 交響楽団」で活躍する演奏家による弦楽三重奏。幅広い世代に鑑賞していただくためにチケット価格を安価に設定したことで、若い来場者が多くみられました。第1部では、『弦楽三重奏曲 長調』を披露。第2部の『ゴールドベルグ変奏曲』では、弦楽の様々な奏法を用いて原曲の世界観が広がり、一流の音楽に酔いしれました。「表情豊かな演奏を最高のホールで体感できた」など感謝のコメントも多くいただきました。



平成の大ヒット恋愛小説を彩るギターの調べ

劇場映画『マチネの終わりに』に登場した音楽の演奏や、芥川賞作家・平野啓一郎による本・映画の魅力が語られた公演。前半は秘蔵エピソード満載の「トーク・ステージ」と、小説のモデルのひとりであったギタリスト・大萩康司の繊細なギターを味わえる「コンサート・ステージ」を披露。後半はナビゲーターとして文筆家の浦久俊彦を交え、クロストークもおこなわれました。

日時 10月9日(月・祝) 15:00~17:00
場所 白河文化交流館コミネス(小ホール)
出演 平野啓一郎(小説家)
大萩康司(ギター)
浦久俊彦(ナビゲーター)

参加者数:	115名
出演者:プロ	3名
出演団体数:プロ	1団体
スタッフ数:	
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	11名
清掃・警備スタッフ数	4名
合計(うちボランティア4名)	15名
外注先数:	2事業者
連携団体数:	36団体





日時 10月15日(日) 14:00～15:00
 場所 交流・観光拠点施設 喰丸小
 (旧喰丸小学校) 音楽室
 出演 TATSUYA (ヒューマンビートボックス)
 凜-Rin- (フラメンコギタリスト)
 大竹涼華 (シンガーソングライター)

DATA 参加者数: 42名
 出演者: プロ 3名
 スタッフ数: 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 25名
 外注先数: 19事業者
 連携団体数 38団体

福島にゆかりのあるメンバーが集い、木造校舎の「旧喰丸小学校」で開催

奥会津を舞台に開催した異分野音楽のコラボレーションライブ。会場とした昭和村の旧喰丸小学校音楽室は、アーティストと参加者との距離が近く、臨場感ある公演となりました。3人は、校舎に差し込む光をイメージした楽曲『ぼくらのうた』など、個性あふれる楽曲を披露。只見町出身の大竹涼華を応援する地元の方をはじめ、県内外から参加者が集まりました。参加者からは「もう一度喰丸小にきてください」「福島への想いを強く感じた」などの声をいただきました。



「文化による地域創生に求められる“人材”と“しくみ”」シンポジウム

地域課題の解決に求められている“文化の力”について考える

「文化による地域創生」を実現するために必要な環境、仕組み、業務のあり方を検討するシンポジウム。会場の方々がスマートフォンから投稿した質問などに講師がリアルタイムで回答する機会も設け、双方向の意見交換もおこなわれました。

終了後に実施したアンケートでは、9割を超える参加者が「満足」と回答。文化や芸術に対する関心も「高まった」という感想が得られました。一方、「もっと多くの方に聞いてもらいたい内容だった」という意見もあり、今後も継続してこのような事業をおこなう必要があると思われます。



日時 10月27日(金) 13:30-17:30
 場所 とうほう・みんなの文化センター (福島県文化センター)
 登壇者 神代 浩 (元文部科学省社会教育課長/図書館海援隊隊長)
 中川幾郎 (帝塚山大学名誉教授/日本文化政策学会顧問)
 天野和彦 (福島大学特任教授/ (一社) ふくしま連携復興センター代表理事)
 森本真也子 (NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会理事)
 玉淵博之 (えずこホール仙南芸術文化センター館長)

DATA
 参加者数: 88名
 登壇者: 5名
 スタッフ数: 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 18名
 清掃・警備スタッフ 6名
 合計 (うちボランティア4名) 24名
 連携先数: 7事業者
 連携団体数: 30団体





マネジメント人材、アーティスト人材の育成を目指す 文化振興における種まき講座



劇場・音楽堂の職員やアーティストたちが共同で、文化政策やコーディネーターの理論のほか、ダンスによる身体表現やリトミック(リズム教育)を取り入れたワークショップの実践方法、学校教育に対する指導案の作成、文化芸術に必要な法律を学ぶ総合的な研修会。立場の違う受講生たちが互いを知り、補い合うことで、より良いアートマネジメントとワークショップを展開する方法を学びました。また、その応用として実際にワークショップ型の演劇公演に向けて、グループワークを重ねて企画・立案をおこないました。

日時 10月28日(土) 9:00-20:25・29日(日) 9:00-18:00
11月25日(土) 9:00-20:10・26日(日) 9:00-17:50
場所 とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)
講師 中川幾郎(帝塚山大学名誉教授/日本文化政策学会顧問)
森本真也子(NPO法人子ども文化地域コーディネーター協会理事)
楠原竜也(玉川大学芸術学部准教授)
杉山智恵子(東京藝術大学音楽学部非常勤講師)
松井憲太郎(富士見市民文化会館きらり☆ふじみ前館長)
戸倉深希子(福島県教育委員会主任社会教育主事)
田島佑規(骨董通り法律事務所弁護士)

DATA

参加者数: 30名 大人(18歳以下) 29名
子ども(18歳未満) 1名
講師: 7名
スタッフ数:
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 6名
清掃・警備スタッフ 6名
合計(うちボランティア3名) 12名
連携先数: 12事業者
連携団体数: 30団体

日時 11月3日(金・祝) 14:00~16:00
場所 南相馬市民文化会館ゆめはっと(大ホール)
出演 舘野泉(ピアニスト)

DATA

参加者数: 285名
出演者: プロ 1名
スタッフ数:
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 21名
(うちボランティア6名)
外注先数: 4事業者
連携団体数: 46団体

音楽する喜び

当館の名誉館長である「左手のピアニスト」舘野泉によるピアノ・リサイタル。87歳でありながら新曲を披露するなど、障がいを乗り越えながら常に新しいことに挑戦している力強い生きざまが伝わる公演でした。エストニアの作曲家ウルマス・シサスクが舘野に献呈した『エイヴェレに降る惑星』など、演奏と本人による解説を交えながらリサイタルが進み、曲の味わいを堪能することができました。また、連携事業として実施することにより、県内全域からの来場者があり、「初めてピアノ・リサイタルを鑑賞しました」などの声も得られました。



満鉄 & 金ボタン with 近藤房之助

あのライブをもう一度
魂のブルースで心躍る夜

日本を代表するブルース歌手・近藤房之助と、結成 50 周年を迎える実力派 R&B(リズム・アンド・ブルース) バンド「満鉄 & 金ボタン」が共演。

1994 年、近藤房之助率いる「Fusa & GRUB STREET BAND」のコンサートが MDD ホールでおこなわれました。当時の音響担当は、ロンドンでおこなわれたレコーディングのエンジニア。今でも MDD ホールの伝説となっています。今回も当時と変わらず、来場者が「魂の Blues」を体感し、大いに満足していただける企画となりました。



日時 11月8日(水) 19:00-20:20
場所 伊達市ふるさと会館 MDD ホール
出演 近藤房之助(ブルース歌手)
満鉄 & 金ボタン

DATA 参加者数: 62名
出演者: プロ 6名
出演団体数: プロ 1団体
スタッフ数: 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 12名
外注先数: 3事業者
連携団体数: 33団体

三四郎 / Mimimika



Jazz の響きをサックスの音色で

福島県伊達市で復興支援コンサートを継続するジャズサックスプレーヤー・藤本三四郎と、福島を拠点に県内外で活動中の実力派ジャズユニット Mimimika によるコンサート。第 1 部は Mimimika として福島を代表するボーカリスト・渡辺美恵子(Mimi)と実力派ピアニスト・三鈿美香、技巧派ベーシスト・田中が素晴らしいサウンドで魅了。第 2 部は三四郎が MDD ホールでの初ライブを開催しました。国際色豊かな感性で、メジャー・マイナーを問わず、常に新しいものに目を向けている姿勢が感じられました。



日時 11月24日(金) 18:30 ~ 21:30
場所 伊達市ふるさと会館 MDD ホール
出演 三四郎 Band、Mimimika

DATA

参加者数: 73名
出演者: プロ 8名
出演団体数: プロ 2団体
スタッフ数: 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 9名
(うちボランティア5名)
外注先数: 5事業者
連携団体数: 32団体



第5回公演オーケストラストーリー
「100万回生きたねこ」



だれもが楽しめる
オーケストラコンサートを開催

絵本の朗読とオーケストラの「コラボレーションコンサート」をオリジナル制作。コンサート前半は、楽器紹介メドレーとして「きらきら星変奏曲」をお届けしたほか、「指揮体験コーナー」をもうけ、子どもから大人まで、みんなが楽しめる内容。後半は、名作絵本『100万回生きたねこ』の世界観を、朗読とオーケストラによるオリジナル音楽によって豊かに表現。新聞などメディアでの宣伝に加え、SNSで制作途中の様子を公開するなどの工夫をおこなったことで、若い世代によるオンラインチケット購入の増加につながりました。

日時 12月3日(日) 15:00～16:50
場所 けんしん郡山文化センター
(郡山市民文化センター)中ホール
出演 金井俊文(指揮)、山崎義也(朗読)
木村裕(作曲)、郡山交響楽団(演奏)

DATA

参加者数：	491名
大人	376名
高校生以下	115名
出演者：プロ	35名
出演団体数：プロ	1団体
スタッフ数：	
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	36名
清掃・警備スタッフ	1名
合計(うちボランティア7名)	37名
外注先数：	25事業者
連携団体数：	34団体



アートマネジメント/ワークショップ研修会
対話型鑑賞公演



研修会受講生が企画・運営・出演まで、
すべてを担う成果発表公演

クリスマス为主题にワークショップ形式の演劇を企画し、「未就学児向け」「小学生向け」の2つのオリジナルプログラムを披露。12月5日は公開リハーサル、6日に伊達公演、7日に三春公演を開催しました。「新聞紙をちぎって雪に見立てよう」「けんかしたトナカイの仲直りから、

対話の大切さを学ぶストーリーにしよう」など、マネジメントする側とアーティストがともに議論を重ねて制作しました。両公演とも予想を大きく超える盛り上がりとなり、子どもたちが元気いっぱいにはしゃぐ姿が印象的でした。

DATA

参加者数：	146名
出演者：	
プロ	12名
アマチュア大人(18歳以上)	4名
合計	16名
スタッフ数：	
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ	43名
清掃・警備スタッフ	4名
合計(うちボランティア5名)	47名
外注先数：	4事業者
連携団体数：	33団体



12月5日(火) とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)小ホール
日時 12月6日(水) 場所 ファミリーパークだて
12月7日(木) 三春交流館「まほら」(まほらホール)
出演 アートマネジメント・ワークショップ研修会修了生

MDD Jazz History Concert

仙台・福島で活動する
実力派のジャズグループが集結

仙台から福島にも広がった東北のジャズの歴史を紐解くコンサート。仙台は、終戦とともに進駐軍が駐留し、進駐軍クラブなどで演奏活動がはじまったことをきっかけに、今や日本有数のジャズの街として知られています。本企画は、福島県や仙台市にゆかりのバンドに加え、福島高校 JAZZ 研究部も参加。また会場ロビーでは「仙台 Jazz History Concert」の協力で、東北のジャズの歴史をものがたる写真パネルを展示しました。



日時 12月17日(日) 15:00 ~ 19:10
場所 伊達市ふるさと会館 MDD ホール
出演 せんだいシティ・ジャズクインテッド
Fukushima Sound Collection ほか



DATA

参加者数：109名
 大人(18歳以上) 99名
 子ども(18歳未満) 10名
 出演者：プロ 5名
 アマチュア大人(18歳以上) 13名
 アマチュア子ども(18歳未満) 15名
 合計 33名
 出演団体数：プロ1団体 アマチュア5団体
 スタッフ数：
 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 11名
 (うちボランティア7名)
 外注先数： 10事業者
 連携団体数 31団体

舞台技術ワークショップ



照明や音響に関する専門的な知識と技術を学ぶワークショップ

2週にわたって、高校生向けと一般向けに内容を分けて開催。各回とも、参加者が積極的に質問していたほか、メモを片手に機材に触れる方や写真を撮りながら研修に参加する方もおり、熱心な姿勢がみられました。1月14(日)には、フリーアナウンサーの高田優美氏を招いて模擬公演を行い、緊張感のある、より実践的な研修となりました。終了後のアンケートでは、全ての回答者が文化芸術への関心が高まったとあり、本企画を今後も継続していくことの重要性を感じました。また、「このような研修会があればまた参加したい」「公演時のバックヤードも見てみたい」という要望もありました。

日時 高校生 1月6日(土) 10:00 ~ 16:00
 1月7日(日) 10:00 ~ 15:30
 一般 1月13日(土) 10:00 ~ 16:00
 1月14日(日) 10:00 ~ 15:30
 場所 とうほう・みんなの文化センター(福島県文化センター)
 講師 福島県文化センター舞台職員



DATA

参加者数：23名 一般 11名
 高校生 12名
 出演者： プロ 4名
 スタッフ数：
 舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 7名
 清掃・警備スタッフ 3名
 合計(うちボランティア3名) 10名
 外注先数： 4事業者
 連携団体数： 30団体



新年を音楽で華やかに彩る
音楽会を開催

クラシックの名曲とオペラを気軽に楽しめる音楽会として開催。ホワイエでは郡山市内の店舗によるワインや軽食などの販売もおこなわれました。ゲストとして福島県二本松市出身でテノール歌手・樋口達哉と父が同県会津若松市出身のソプラノ歌手・鷺尾麻衣が登場。ふたりはオーケストラの演奏に合わせて『椿姫』より“乾杯の歌”など、美しく迫力ある歌声を披露しました。参加者からは「知っている曲が多くてとても楽しめた」「ソリストや司会者とのMCがあり、演奏会を通して楽しかった」といった声をいただきました。

日時 1月13日(土) 15:00～16:50
場所 けんしん郡山文化センター
(郡山市民文化センター) 中ホール
出演 小松拓人(指揮)
樋口達哉(テノール)
鷺尾麻衣(ソプラノ)
郡山交響楽団(演奏)

DATA

参加者数： 303名
大人(18歳以上) 297名
子ども(18歳未満) 6名
出演者数：プロ 57名
スタッフ数：プロ 1団体
舞台・技術関係+運営・制作関係スタッフ 20名
清掃・警備スタッフ 1名
合計(うちボランティア10名) 21名
外注先数： 29事業者
連携団体数： 34団体



ライブ・エール
スタンプラリー

スタンプを集め、
パンフレットをSNSに投稿すると、
抽選で福島県内各地の特産品が当選

「JAPAN LIVE YELL project in ふくしま」全22企画の参加者を対象に実施したスタンプラリー。県内各地の商工会議所のご協力を得て、ペア宿泊チケットや地酒、海産物詰め合わせセットなどを用意。スタンプを集めた方の中から抽選で景品をお渡ししました。企画ごとに異なるデザインのスタンプを用意し、集めなくなる工夫をしました。また、スタンプラリーを目的に、これまで訪れることのなかった地域やライブへの参加を促すきっかけになりました。



当選者数：80名

ご協力：福島県商工会議所連合会

福島商工会議所／郡山商工会議所／会津若松商工会議所
いわき商工会議所／白河商工会議所／原町商工会議所／
会津喜多方商工会議所／相馬商工会議所／
須賀川商工会議所／二本松商工会議所



広報

「JAPAN LIVE YELL project in ふくしま」開催にあたり、公式ホームページをはじめ、公式 SNS・事業総合パンフレット・プレスリリース資料等を制作し、全 22 企画や共通企画「ライブ・エール スタンプラリー」などの紹介を行いました。

公式 YouTube では、連携構成団体へのインタビュー動画やアーティストからのメッセージ動画など 18 本を投稿しました。公式 X では 114 ポスト、公式 Instagram では 153 枚の写真を投稿。企画告知にとどまらず、リハーサルや楽屋の様子、スタッフの日常など、日々の出来事をリアルタイムで発信しました。また、出演したアーティスト・講師・参加者・舞台スタッフなど、ライブにかかわるすべての人を記録し、常に投稿することで、わたしたちの取り組みを、ひろく周知しました。

※本文・表中の数値は 2024 年 8 月から 12 月末までの数値です。



公式 YouTube



DATA

公式ホームページ	ページビュー数	17,683 件
	ページビューあたりの平均滞在時間	82.2 秒
公式 X	投稿数	114 件
	インプレッション数	856,589 回
	エンゲージメント数	29,476 回
公式 Instagram	投稿数	153 件
公式 Facebook	投稿数	33 件
公式 YouTube	投稿数	18 件



公式 SNS



事業総合パンフレット



公式ホームページ

メディア掲載

事業実施にあたり、福島民報社・福島民友新聞社ほか各社に、本事業について取り上げていただきました。また、NHK 福島放送局には「音楽と語りによるフクシマの伝承と未来～請戸小学校物語～」を継続的に取材していただき、情報番組「はまなかあいつ TODAY」に特集として紹介されました。また「NHK NEWS おはよう日本」でも「震災を語り継ぐ 若者の挑戦」として全国に放送されました。

PRESS

日付	社名	面	欄	記事タイトル
6月7日	福島民友新聞社	3	総合	文化施設と初の連携事業 福島県振興財団、県内各地で8月から
7月25日	福島民報社	13	ワイド	「請戸小学校物語」8月12日福島市で公演 音楽や語りで震災と原発事故の記憶を未来につなぐ
7月27日	河北新報社	25	とうほく	福島・浪江の請戸小の教訓を演劇に 語り部と和楽器奏者共演 福島・8月12日、若者視点で伝える
8月5日	福島民報社	3	総合	「JAPAN LIVE YELL project in ふくしま」始まる 「喜多方発21世紀シアター」トップに
8月11日	毎日新聞	19	福島地域	命の大切さ考えて あす福島で請戸小題材の構成劇 震災知らない子どもたちへ
8月21日	福島民友新聞社	11	ジュニア	津波から避難 教訓伝える
9月7日	福島民友新聞社	8	地域ワイド	若手音楽家が古里共演 福島で22日コンサート 独自のな曲披露
9月21日	福島民友新聞社	22	みんなの随想	ビッグパレット避難所記
9月22日	サンケイリビング新聞社	10	イベント information	バリアフリー演劇「Touch ～孤独から愛へ～ ORPHANS」
9月24日	福島民報社	11	ワイド	[福島市] 息の合った演奏で魅了県内出身・在住アーティストオリジナル曲も
10月4日	福島民報社	11	ワイド	城下町で多彩な音色 7日から9日まで白河まちなか音楽3Days
10月4日	福島民友新聞社	3	総合	手話、字幕で「熱演」 支援学校生 舞台裏見学、触れて体感福島でバリアフリー演劇
10月8日	読売新聞社	27	福島県	富岡の町民劇団 旗揚げの朗読劇震災伝承 福島で公演
10月8日	福島民報社	15	ふくしまは負けない明日へ	震災越え 前向く町民表現 富岡町民劇団 福島で初公演 声合わせ「生きてゆく」
10月15日	福島民友新聞社	11	会津	本県ゆかり若手アーティスト応援きょう昭和でコンサート
11月10日	福島民報社	13	ワイド	文化による地域創生を考える 県文化財団がシンポ(福島)

8月23日	NHK 福島放送局	18:10 ~ 19:00 放送	はまなかあいつ TODAY『請戸小学校 次の世代へ』
9月13日	NHK	5:00 ~ 7:45 放送	NHK NEWS おはよう日本『震災を語り継ぐ 若者の挑戦』

※上記のほか NHK 盛岡、仙台、水戸の各放送局で紹介いただきました。

福島県文化芸術連携事業－JAPAN LIVE YELL project in ふくしま－ 2023 事業報告書

発行日：2024年1月30日

発行者：公益財団法人 福島県文化振興財団

〒960-8116 福島県福島市春日町 5-54

とうほう・みんなの文化センター（福島県文化センター）

TEL 024-534-9191 / FAX 024-536-1926 / Mail culture@fcp.or.jp

助成 文化庁文化芸術振興費補助金（統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業（アートキャラバン2））
独立行政法人日本芸術文化振興会

事業名 JAPAN LIVE YELL project

主催 公益財団法人福島県文化振興財団／公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

連携構成団体 公益財団法人福島県文化振興財団／一般社団法人ふくしま連携復興センター／一般社団法人郡山交響楽団／
（各主催団体） 特定非営利活動法人カルチャーネットワーク／喜多方発 21 世紀シアター実行委員会／
公益財団法人南相馬市文化振興事業団／特定非営利活動法人 MDD スタッフ／三春交流館運営協会

共催 福島県
東日本大震災・原子力災害伝承館（音楽と語りによるフクシマの伝承と未来）／
一般社団法人ふくしま連携復興センター（生きている生きてゆく～ビッグパレットふくしま避難所記より）

協力 只見川電源流域振興協議会（柳津町・三島町・金山町・昭和村・只見町・南会津町・檜枝岐村）／
特定非営利活動法人富岡町 3・11 を語る会／福島県商工会議所連合会／福島商工会議所／郡山商工会議所／
会津若松商工会議所／いわき商工会議所／白河商工会議所／原町商工会議所／会津喜多方商工会議所／
相馬商工会議所／須賀川商工会議所／二本松商工会議所／社会福祉法人福島県共同募金会（パリアフリー演劇公演）

後援 福島県教育委員会／福島民報社／福島民友新聞社／朝日新聞 福島総局／毎日新聞福島支局／
読売新聞東京本社福島支局／産経新聞福島支局／河北新報社／時事通信社 福島支局／共同通信社 福島支局／
NHK 福島放送局／ラジオ福島／福島テレビ／福島中央テレビ／福島放送／テレビユー福島／ふくしま FM ／
公益社団法人福島県視覚障がい者福祉協会（パリアフリー演劇公演）／一般社団法人福島県聴覚障害者協会（パリアフリー演劇公演）



**JAPAN
LIVE YELL**
project

